

氏 名 小寺 未知留
 ヨ ミ ガ ナ コデラ ミチル
 学 位 の 種 類 博士（音楽学）
 学 位 記 番 号 博音第305号
 学 位 授 与 年 月 日 平成30年3月26日
 学 位 論 文 等 題 目 〈論文〉レナード・マイヤーの音楽論および米国におけるその学際的受容
 —音楽理論と音楽心理学／音楽美学／ニュー・ミュージコロジー—

論文等審査委員

| | | | | |
|----|--------|-----|--------|--------|
| 主査 | 東京藝術大学 | 教授 | （音楽学部） | 福中 冬子 |
| 副査 | 東京藝術大学 | 教授 | （音楽学部） | 土田 英三郎 |
| 副査 | 東京藝術大学 | 教授 | （音楽学部） | 大角 欣矢 |
| 副査 | 東京藝術大学 | 准教授 | （音楽学部） | 西間木 真 |
| 副査 | 玉川大学 | 教授 | （芸術学部） | 高岡 明 |

（論文内容の要旨）

レナード・マイヤー（1918～2007）は、アメリカの音楽理論家であり、戦後米国の音楽研究に多大な影響を与えたひとりである。彼の音楽論は、音楽理論領域のみならず、音楽心理学や音楽美学、音楽学の研究においても参照・議論されてきた。本論文は、彼の初著『音楽における情動と意味』が出版された1956年から1980年代初めまでになされた、彼の音楽論に対する学術的著述を検証し、そこに反映されている音楽理論と他の学問領域との関係性を明らかにする。言い換えれば、これは、複数の学問領域における、さまざまなマイヤー像を探求するものでもある。

第1章では、対象期間内の心理学・音楽心理学および音楽理論関連の学術誌におけるマイヤーへの言及・論及を調査し、マイヤーの音楽論を介した、音楽心理学と音楽理論の関係性を明らかにした。マイヤーの音楽論は多くの心理学研究において参照され、『音楽における情動と意味』は今日、音楽情動に関する古典的研究とみなされているものである。調査の結果、音楽情動、リズム知覚、旋律知覚によって、マイヤーの音楽論の受容過程および、それを介した両領域の関係性が大きく異なっていることを示した。特に、グローヴナー・クーバーとの共著『音楽のリズム構造』（1960）が、リズムのグルーピングと階層的構造に関する先駆的研究として、両領域のリズム研究において重要な役割を果たしていたこと、また、音楽心理学の領域におけるマイヤー受容の背景には、認知革命という外的要因も大いに作用していたことを指摘した。

第2章では、美学領域、特にJournal of Aesthetics and Art Criticism（以下、JAAC）におけるマイヤー受容について網羅的調査した。その結果、美学領域においても、彼の音楽論は、現代音楽や情報理論などと関連して比較的頻繁に参照されていることが明らかになった。しかしながら、音楽理論領域とは対照的に、『音楽のリズム構造』に言及する論考はJAACでは3件のみに留まっていた。また、JAACには、「超越主義」—ジョン・ケージなどが依拠するイデオロギーを指すマイヤー独自の用語—への言及が見つかるが、これは理論領域には見当たらなかったものである。これらのことから、マイヤーの音楽論が、両領域に共通する論題を提示していなかったことが明らかになる。

第3章では、マイヤーと最初期のニュー・ミュージコロジーとの関係性を明らかにすべく、彼が「批評的分析」（1973）と呼ぶものと、ジョゼフ・カーマンの「批評」（1985）とを比較した。音楽の意味作用を論じる多くの研究者がマイヤーの音楽論を参照しているだけでなく、ニュー・ミュージコロジストとして知られるスーザン・マクラリーとローズ・サボニックは、マイヤーのことをニュー・ミュージコロジーの先駆的研究者とみなしていた。しかしながら、「批評的分析」が理論研究にその基礎を置いていたために、マイヤーは、歴史研究に立脚したカーマンの「批評」を担う研究者としてはみなされなかったのである。これは、最初期のニュー・ミュージコロジーが、音楽理論からは距離をとっていたこともまた示している。

第4章では、マイヤーと〈ポストモダニズム〉の関係について論じた。20世紀の音楽文化を予期するものとしてマイヤーが提示した「揺動的停止」は、1980年代初めまでは消極的に評価されていたが、1980年代末以降、肯定的に評価されるようになる。「揺動的停止」は、直線的な進歩史観に代わって、複数のイデオロギーが並存している〈ポストモダニズム〉を予期したものとしてみなされているのである。しかしながら、ナオミ・カミングは、マイヤーの音楽論が普遍的なものを重視しているとして、それが〈ポストモダニズム〉に抗するものであると指摘している。本章では、彼女の指摘を敷衍し、「揺動的停止」が〈ポストモダニズム〉に対して二面性を有していることを示した。

結論では、音楽理論、音楽心理学、音楽美学におけるマイヤーの音楽論の受容過程を明らかにし、複数の学問領域で議論されてきたさまざまなマイヤー像について詳述した。マイヤーは、心理学的知見を音楽に援用する研究者であり、「公式」の美学者ではないとされていた。また、分析に魅了された批評家のひとりにも数えられ、〈ポストモダニズム〉に対しては二面性を示していたのである。さらに、音楽理論と他領域—音楽心理学、音楽美学、最初期のニュー・ミュージコロジー—との、マイヤーの音楽論を介した関係性についても詳説した。これらの結論は、マイヤーというひとりの音楽研究者、また、戦後米国の音楽研究史の理解に大いに貢献するものであると考えられる。

（総合審査結果の要旨）

本研究は、第二次大戦後の音楽研究において、音楽構造、音楽的意味、およびその認知を巡る省察に大きな貢献をし、音楽研究の多岐に亘るサブ領域（音楽理論、音楽分析、音楽美学、音楽心理学等）で影響力を持つ研究を著したレナード・マ

マイヤーが、どのような文脈で、どのような新たな音楽研究上の知見を呈したものとして関係研究領域において記述されてきたのかを検証することを通じ、マイヤーの学際的考察作業とそれを下支えたであろう動機（イデオロギーに近いものも含め）の実態を明らかにすることを目的とする。マイヤーによる研究はその射程が従来の「音楽研究」には収まらないばかりか、北米の音楽学で 1980 年代におこった大きなパラダイム・シフトを（間接的に）後押しし、その意味で、マイヤーの仕事を検証することは、音楽研究と、それと何らかの形で方法論、研究動機、語彙を共有する諸領域との関係性を検証することをも意味する。本論文はそうした前提にたち、音楽心理学（第一章）、美学（第二章）、ジェンダー論、ポスト・コロニアル論、記号論の方法論や概念を援用したニュー・ミュージコロジー（第三章）領域において発表された研究においてマイヤーがどのように位置づけられてきたのかを詳細に分析したのち、第四章においてマイヤーの「同時代性」をポスト・モダンという切り口から総括し、結論へと結びつけている。その作業から浮かび上がるのは、マイヤーによる、理論や概念の援用を通じての音楽学プロパー以外の領域への参照は、時に「公式的なものではない」とみなされ、その理論的ほころびが批判された一方で、マイヤーが、音楽の美的実体は（基本的には各作品の構造に依拠させつつも）、その認知の仕組み（聴取者側）の解明を通じてこそ明らかになるとしたことであり、また、そうした「体験されるもの」として音楽を理論的に再認識することが、結果として、伝統的な音楽研究の発展に向けた一つの突破口として機能した、という事実であろう。

本研究の評価されるべき点として、まずなによりも、膨大な数の出版物が網羅的に検証されていることが挙げられる。この検証作業は、マイヤー研究にとどまらず、音楽学領域が戦後様々な専門的分岐を通じて自己定義されてきたプロセスを知るうえでも、貴重な基礎研究となるであろう。とりわけ、音楽史研究と音楽理論が完全に分離している北米の音楽研究の党派性を知る上でも、有用な資料となっている。

他方、問題点も指摘できる。とりわけ学位審査会上では、学術論文の網羅的検証の手続きの妥当性において疑問が呈された。堅牢な統計学的検証がなされていない、あるいは検証対象とした学術誌の選択基準が曖昧である、といった指摘は妥当なものであるが、後者に関しては、論述の不備に依るところも多いので、反省点とすべきであろう。論述の不備ということに関して言えば、第四章におけるマイヤーの「ポスト・モダンの」二面性に関しても、やや独善的な論考が展開されているとの指摘がなされた。一人の審査委員から意見が出されたように、これに関しては、「現場」にいなかった執筆者の誤読と言えるかもしれないが、他方、マイヤーの生徒や関係者への聞き取りという、いわば民族誌的な方法を敢えてとらず、外部者によるあくまでも客観的な検証として本論文の意義を認めることもまだ重要であると言えるだろう。

以上、全体として非常に意義深い研究成果を挙げていることをもって、審査会全員一致で合格とした。